

# 小学校家庭科の栄養教育における 家庭との連携の可能性

伊藤 圭子・中島 祥子<sup>1</sup>

(2009年10月6日受理)

The Possibility on the Methods of Coordination between School  
and Families in Nutrition Education of the Homemaking in Elementary School

Keiko Ito and Shoko Nakashima<sup>1</sup>

**Abstract:** Since children's dietary habits are greatly influenced by their families, we cannot expect good results only from dietary education at school. We believe it indispensable for the school to closely coordinate with the families. This report considers the survey on the parents' thinking of the dietary education methods in view of coordination between the families and the school. The survey targeted the parents of children in the 5<sup>th</sup> grade. (1) Many of the parents attach special importance to "nutrition" in dietary education. 73.3% of them believe that their children should learn nutritional science both from school and their families. (2) When the parents are asked what they wish for the future nutritional education, what many of them answered includes the contents of home economics curriculum currently practiced at school. It is considered that the contents of home economics classes at school are accepted by the parents. And, therefore, it is necessary to take measures to make the contents of nutritional education at school practiced at home, too. (3) we need to establish the coordinating methods with which teachers, parents, and students can learn each other, instead of one-way supply of information from school to families.

Key words: homemaking in elementary school, coordination between school and families  
nutrition education

キーワード：小学校家庭科，家庭との連携，栄養教育

## 1. はじめに

家庭科は、生活者としての生活実践力を育成させる教科である。生活実践力とは「学習者の家庭生活を中心として現実生活世界の中で、福祉および自己実現をめざして、生活環境や生活文脈を熟慮して、より最適な生活行為を遂行する能力<sup>1)</sup>」である。この能力は、学校における学習をもとに、自らの生活の中で活用することによって初めて自分の力となって獲得される。

しかし、これらの過程をすべて限られた家庭科授業時間内に実践することは困難である。さらに、いつ、どこで、どのような生活場面で活用することが最も適切であるかは子ども一人ひとりによって異なることから、子どもの生活実態にあった個別指導が必要となる。つまり、家庭科教師と保護者が連携して子どもの主体的な活動を支援するという観点から、家庭科授業を変えていくことが必要である。

中央教育審議会答申『初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について』（平成15年10月）において「子どもたちの教育は、学校・家

<sup>1</sup> 国立武蔵野学院附属児童自立支援専門員養成所

庭・地域社会が、それぞれの特質を生かした適切な役割の分担をしつつ全体として行うものであるという視点を持ち、様々な形で保護者や地域住民等との連携・協力を得ることが不可欠である。」と指摘され、平成20年3月に告示された学習指導要領において家庭との連携が強調されている。すなわち、子どもに生活実践力を育成するためには、特に学校における家庭科授業と家庭とが連携し、それぞれの役割を担うことが求められている。

それぞれの役割として、家庭においては、習得した生活実践力を生活の中で具現化し、活用できるように環境整備を行う役割が期待される。

家庭科授業においては、①生活実践力の体系的な習得、②「情報発信と情報受信の基地としての機能<sup>2)</sup>」としての役割が期待されている。情報発信とは、家庭科担当者から家庭への働きかけを意味する。例えば、保護者に対して、家庭科における学習内容と子どもの学びの実状に関する情報、環境整備の支援者としての知識と意識の向上を促す情報などを発信する。情報受信とは、家庭での子どもの実状や保護者の問題状況に関する情報について、家庭から家庭科担当者への働きかけを意味する。

一方、生活の中でも食に関する問題は急務の課題となっている。朝食を欠食する子ども、栄養的バランスが偏った食事を摂っている子ども、肥満や生活習慣病の子どもなど様々な問題が生じている<sup>3)</sup>。そのため、子どもたちが栄養的なバランスに基づいた食事を判断・選択・決定し、それを自身の日常生活に生かすことができる食物選択能力を習得することは、自分の健康を自分で維持するために重要なことである。しかし、子どもたちの食生活は家庭の影響が大きく、多様化しており、学校において食生活教育を行うだけではその成果が期待しにくい。つまり、家庭との連携が不可欠であり、子どもの食生活の自立に向けて、どのように支援していくかが重要となる。

そこで本稿においては、食生活における自立を可能とする生活実践力習得の観点から、特に栄養教育に焦点をあてて、家庭科授業および家庭の役割を遂行するための課題を明確にした上で、家庭科と家庭とが連携・協働するための方略について検討することを目的とする。

## 2. 方法

保護者の食に関する意識と実状を把握するために、H大学附属小学校5年生の保護者75名を対象に、無記名による調査を実施した。なお、調査用紙は学級担任

が子どもを介して保護者に依頼し、回収した。調査時期は2008年7月上旬、有効回収率は100%であった。主な調査項目は、家庭での食に関する会話内容、子どもの偏食に対する対応、保護者の栄養に関する知識、食教育において重要と考える内容、食に関する内容の教育主体、今後の栄養教育への要望などであった。

## 3. 結果及び考察

### 1) 支援者としての保護者の適性

保護者が子どもによって家庭での活用を可能とする環境整備を行う支援者としての役割を担うようになる必要がある。そのためには保護者自身に、支援者となる心構えや栄養に関する重要性の認識、栄養に関する指導技術の有無などが求められる。

まず家庭で子どもと食に関する話をするかを問うた結果、「よく話す」(17.7%)、「たまに話す」(51.5%)「あまり話さない」(27.9%)、「ほとんど話さない」(2.9%)であり、「よく話す」「たまに話す」を合わせると約7割の者が子どもと食に関する会話を行っていることが理解された。そこで、どのようなことを話しているのかを把握するため、会話内容を具体的に自由記述で問うた。その結果を表1に示す。この表から、最も多い会話内容は「食品とその働きについて」(80.9%)であり、次いで「食べ方について」(25.5%)「栄養的バランスについて」(14.9%)の順に多く挙げられていた。この中で、子どもから保護者に働きかけた記述は\*印のついた2件が見られただけであり、その他の記述はすべて保護者から子どもへの食指導となってい

表1 保護者と子どもとの会話内容（複数回答）

会話内容（具体例は原文通り）	人数(%)
食品とその働きについて	
*子どもがメニューをみて、これはアカのもの、キヨロのもの、ミドリのもの、と確認してくる。この食材は何に入るかと栄養素分類に興味をもって聞いてくる。 *子どものメニューについて話をしたり、おいしかったものを詳しく（材料等）聞く ○この野菜とか果物を取ると、こういう風な体の働きがいろいろで、食べましょう。例えば...白ネギを食べると頭が良くなるし、風邪もひかないのよ...と。 ○この食品にはこんな栄養があり、身体にこんな役割がある ○この食材にはこんな栄養（ex. 魚→カルシウム）が含まれているから体にいいのよ、等	38 (80.9)
食べ方について	
○ごはんとおかずは交互に。 ○野菜はお肉の2～3倍は食べるようにするよ	12 (25.5)
栄養的バランスについて	
○バランスやその食材のいいところや偏りがキケンなことなど（色のバランスも） ○野菜、肉、魚、豆、ごはんをバランスよく食べると、太りにくいということ（ごはんだけ、肉だけはNG）。 ○今日の献立は、赤・黄・緑のものがバランス良くあるね、等	7 (14.9)
食べる量について	
○体重の増加に伴い、間食を減らすこと ○甘いものは1日1回にしましょう。等	3 (6.4)
食事の大切さについて	
○朝食が一番大切、頭の働きが良くなる。 ○好き嫌いをいであいるんまものを食べないと大きくなれないよ	2 (6.3)
その他	
○その季節の体にとって大切な食材や「旬」のものについて ○漬物をひかえるよう食事中に話します。 ○酸っぱいもの...今の時期はしぜんと欲しくなる＝身体が欲している 等	6 (12.8)

た。さらに、その内容を詳細にみると、「白ネギを食べると頭が良くなる」など信憑性に欠ける記述内容がみられた。このことから、食に関する会話の多くが栄養に関する内容であったが、保護者は正しい知識を持ったうえで、どのような食事であればバランスの良い食事かを適切に子どもに対して指導ができているのか危惧される。

表2に保護者が食生活に関する内容の中で何を重要と考えているかを問うた結果を示す。なお、これは食生活に関する12項目の内容の中から重要と考える3項目を選択させている。この表から、「栄養の確保」が73.3%で最も多く、次いで、「食事時のマナー」(57.3%)「安全性」(46.7%)「健康への影響」(37.3%)の順に重要と考えられていることが理解された。

表2 食生活の中での重要項目

食生活の内容	人数	(%)
栄養の確保	55	(73.3)
食事時のマナー	43	(57.3)
安全性	35	(46.7)
健康への影響	28	(37.3)
食事を通しての交流	17	(22.7)
手作り	17	(22.7)
食品の選択	12	(16.0)
食文化の継承	9	(12.0)
食べ残しや廃棄など環境への影響	3	(4.0)
嗜好	2	(2.7)
調理技術	1	(1.3)
経済性	1	(1.3)
その他	1	(1.3)

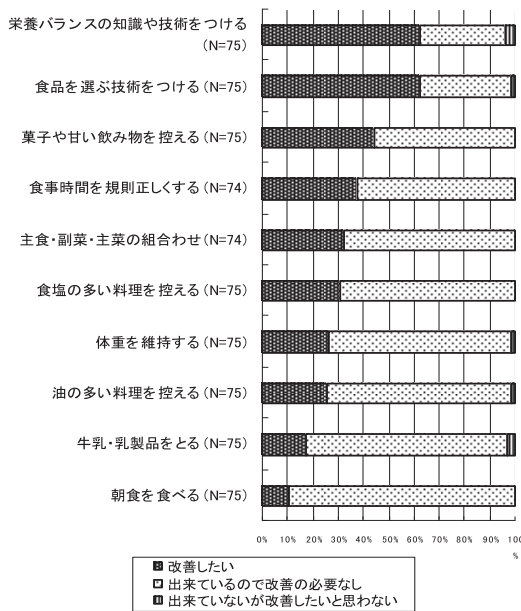


図1 子どもの食習慣に対する保護者の改善意識

このように多くの保護者が「栄養の確保」を最も重要と考えているが、果たして正しい栄養に関する知識を持って子どもの栄養教育を行っているのだろうか。この知識については、食品とその働きに関する内容(8問)、バランスの良い献立作成に関する内容(2問)の計10問で問うた。その正答数をみると、3問以下が6名(8.0%)、4~5問が23名(30.7%)、6~7問が15名(20.0%)、8問以上が31名(41.3%)であり、すべての保護者が栄養に関する正しい知識を持っているとは言い難い状況がみられた。特に「豚肉、強化米、卵、豆類、ラッカセイ、野菜など」の栄養素の働きを「脚気、神経炎の予防」と結びつける問題、「ミカン、レモン、カキ、キャベツなど」の栄養素の働きを「かい血病を防ぎ、歯や骨の発育を助け抵抗力を増す」と結びつける問題を誤答する者が多くみられた。

次に、保護者が子どもの食習慣に対してどのような改善意識をもって食生活を営んでいるかを把握する。そのことを図1に示す項目によって問うた結果、子どもに「栄養バランスの知識や技術をつける」(62.7%)「食品を選ぶ技術をつける」(62.7%)ことを多く望んでいた。ただ気になるのは5項目において「出来ていないが改善したいと思わない」と回答した保護者が若干名ではあるがみられることである。特に「栄養バランスの知識や技術をつける」ことは健康な食生活を送る基礎となる。

では、子どもの食行動に対して保護者は実際にどのように働きかけているのだろうか。子どもが偏食をした時の具体的な言葉かけを自由記述で問い、分析した結果を表3に示す。この表は、保護者の言葉かけを、中山勘次郎氏による分類<sup>4)</sup>別、言葉かけの内容別(栄養的・健康的内容、心情的内容、その他)に分類したものである。

この表から最も多かった言葉かけは、嫌いなものを残そうとする子どもに対して、明確な説明や具体的な指示を与える「指示的指導」であった。具体的な言葉かけとしては、栄養的・健康的な側面からは「バランスよく食べないといけないので残っているものも食べなさい」、また心情的な側面からは「食べ物を残すと作ってくれた人に悪いですよ」といったものが認められた。その次に多くみられたのが、指示は与えてもその内容が一面的であったり、否定的である「一面的指示」の言葉かけであった。具体的には「残さずきれいに食べなさい」「残したら、今度からそればかりですよ」といったものが認められた。次いで、「明瞭化」(理由を問うたり、説明を求めるなど)、「受容的指導」、「単純な受け入れ」(単純な賞賛や同意など)の順に多く言葉かけがみられた。中山氏は、最も効果的な言葉が

表3 子どもの偏食に対する保護者の言葉かけ

分類	保護者の言葉かけ（原文通り）		
	栄養的・健康的な内容	心情的な内容	その他
単純な受け入れ N=2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おやつを食べ過ぎたね</li> <li>・量が多過ぎたね</li> </ul>		
受容的指導 N=4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おやつが多かった？学校から帰る時間が遅い時は、量を考えて、がまんしようね。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少し手伝ってあげるから残りは頑張ろう。</li> <li>・無理する事はないけど、もう一口食べてみたら？</li> <li>・無理せんでいいよ。大人になったら食べれるようになるから。でも、一つはがんばろうね。</li> </ul>	
明瞭化 N=8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体調が悪い？</li> <li>・間食をした？</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作っている人がどういう気持ちになるか考えてみよう。</li> <li>・何で食べないの？</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・味はどうだった？</li> </ul>
指示的指導 N=27	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バランス良く食べないといけなくて残っているものも食べなさい。</li> <li>・食べ物が偏ると子供でも成人病になるよ。</li> <li>・体の為だから食べなさい。</li> <li>・かぜをひかないように食べなさい。</li> <li>・ごはんばっかり食べないで、順番（交互）に1→2→3で食べなさい。</li> <li>・朝ごはん、ちゃんと食べないとお昼までもたないよ。</li> <li>・栄養が足りなくなってかぜをひくよ。</li> <li>・骨が丈夫にならないよ。</li> <li>・牛乳飲まないよ、背が伸びないよ。</li> <li>・これを食べると体が元気になるよ。早く走れるよ。</li> <li>・ボールを遠くにけりたかったら、脚が速くなりたかったら食べた方がいいよ。</li> <li>・明日からおやつは食事の後にしようね。</li> <li>・残した物がどんなに体に良いか説明する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食べ物を残すと、作ってくれた人に悪いですよ。</li> <li>・魚なら→こんな姿になって人間に食べられることもなく捨てられて…。うかばれない。</li> <li>・もう一口食べよう</li> <li>・あと半分 or 1/3 or 一口ずつ食べて終わりにしよう。</li> <li>・食べれるまでもう少しがんばってごらん。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一回は残さず食べようね。</li> <li>・休憩して食べなさい。（1時間後ぐらいで再び食べる。）</li> <li>・ゆっくり噛んで食べなさいよ。</li> </ul>
一方的指示 N=11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・好きな物ばかりで野菜を残すなら、スナックはダメヨ！</li> <li>・残す様なら、最初（はしを付ける前）から取り置きなさい。</li> <li>・夕飯の残りは朝食時に食べることに！</li> <li>・野菜も食べて！</li> <li>・嫌いな物も食べないと好きな物も食べられないよ。</li> <li>・ちゃんとバランスを考えて食べなさい。</li> <li>・栄養を考えて作っているのだから食べなさい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・残したら、今度からそればかり出すよ。</li> <li>・どうしても残すのなら、それにかかわった人たちに謝りなさい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ご飯粒がまだお茶碗についてるよ。</li> </ul>
その他 N=2		<ul style="list-style-type: none"> <li>・もったいない</li> </ul>	

けは子どもを受容したうえで指導・助言を行う「受容的指導」であると指摘している。本調査においては「おやつが多かった？学校から帰る時間が遅い時は量を考えてがまんしようね」という1件がみられただけであった。保護者が「これが嫌いなんだね、でもこれはこんなふうには体にいいから食べようね」などのような「受容的指導」をさらに用いることで、子どもの行動変容を支援することが可能となろう。

以上から、保護者は、食生活のうち特に栄養に関する重要性を認識しているが、子どもの食生活を正す最適な方法で接しているとは言い難い事例があることが理解された。嫌いな食品をなくすような食事の雰囲気

作りなども必要ではあるが、子どもに対する言葉かけも一つの大きな要因となっているといえる。

## 2) 保護者の学校における栄養教育に対する要望

食生活に関する教育内容の中で最も重要と考えている「栄養」に関する内容を学校、家庭、その他のうちどこが主体となって教えるべきかを問うた結果を図2に示す。さらに、これらの内容をいつから教えるべきかと考えるかを問うた結果を図3に示す。

図2から、学校と家庭の双方で教えるべきと考えられている内容としては、「栄養に関する知識」が79.7%と最も多く挙げられていた。これは、家庭では学校で得た栄養に関する知識を実践の場で活用しなが

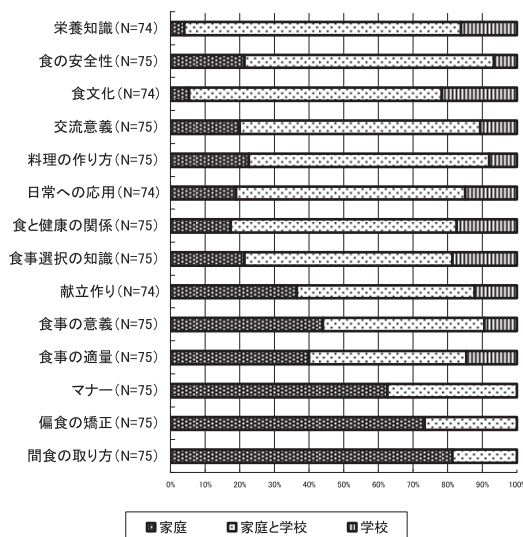


図2 栄養に関する内容の教育主体

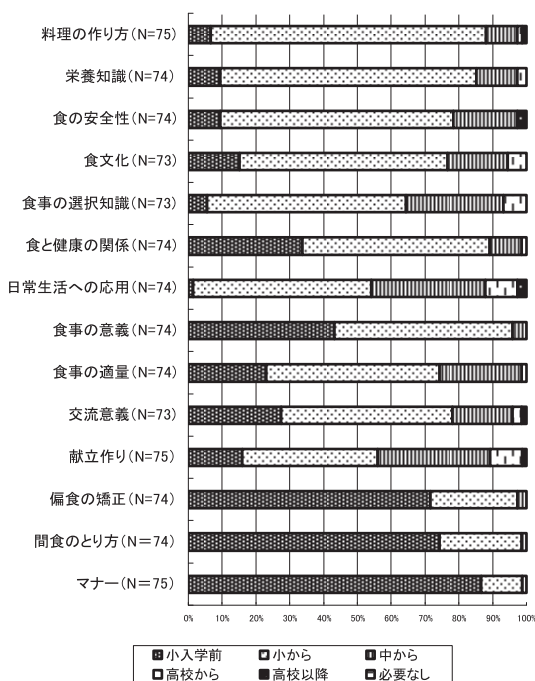


図3 栄養に関する内容の教育開始時期

ら定着させることが必要であると捉えられていると推察される。そして、図3から、この内容は小学校から教えるべきと考えている者が多くみられた。家庭が主体となって教えるべき内容としては、「間食のとり方」(81.3%)「偏食の矯正」(73.3%)の順に多く挙げられていた。これらの内容は小学校入学前から教えるべき

と考えている者が多い。家庭において責任をもった教育が期待できるのであればよいが、一方で子どもに迎合し、過保護な保護者の存在が指摘されている<sup>5)</sup>。幼少時期から家庭で繰り返し習得することは必要であるが、これらの内容項目はその実施において嗜好欲求が阻害要因となることがあり、家庭だけの教育に限界が生じる場合もみられる。よって、これらの項目も学校と家庭の双方で教えることが有効であると考えられる。

学校が主体となって教えるべきとする内容としては、「食文化」(21.6%)「食品選択の知識」(18.7%)「食と健康の関係」(17.3%)「栄養に関する知識」(16.2%)「栄養知識の日常生活への応用」(14.9%)の順に多く挙げられていた。これらの項目のうち、「栄養知識の日常生活への応用」「食品選択知識」は中学校から教えるべきと考えている者が多くみられた。しかし、中学校以前においても毎日食事は摂っているのであるから、中学校以前から習得しておくべき内容であると考えられる。

これらのことから、学校のみが食に関する教育の主体と考えている保護者は少なく、特に栄養に関する内容は、学校と家庭とが連携して、小学校の時期から行うことが有効であると考えている保護者が多くみられた。

では、このように考える保護者は学校での栄養教育にどのような要望を持っているのであろうか。このことについて自由記述で回答を求め、KJ法により解析した結果を図4に示す。なお、紙面の都合上、3段階以上について図示している。学校の栄養教育に対して保護者は、「食の意義」を認識させた上で、「食品群の働き、安全性、量などをふまえて食品選択をし、栄養的にバランスのよい食生活が営める授業をしてほしい」さらに「将来大人になった時に、健康な生活を送るための知識・技能を家庭と学校で身につけさせたい」と要望し、その一連の学習に際しては「日常生活で実践できるように授業を工夫してほしい」と望んでいた。さらに、この一連の栄養教育を支える意見として、「子どもが食に興味を持ち、家庭で実践できるように学校と家庭が連携できる取り組みを行ってほしい」という「学校と家庭の連携」を求める意見が挙げられていた。しかし一方で、学校での栄養教育において「基礎的生活習慣を身につけさせてほしい」とする要望がみられた。

以上のような結果から、今後は学校での授業内容が家庭に浸透し、保護者と学校とが共通の意識や目標を持てるような方法を検討する必要がある。また、子どもの学習した内容が家庭において実践され、定着するための連携の手立てを講じる必要がある。

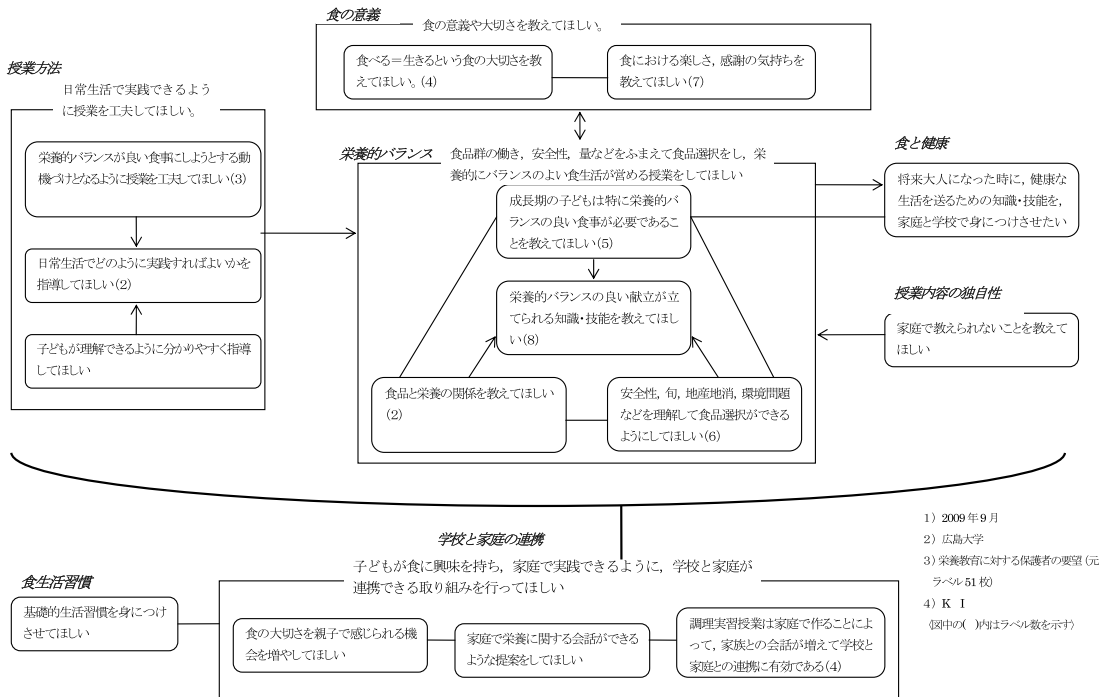


図4 学校における栄養教育に対する保護者の要望

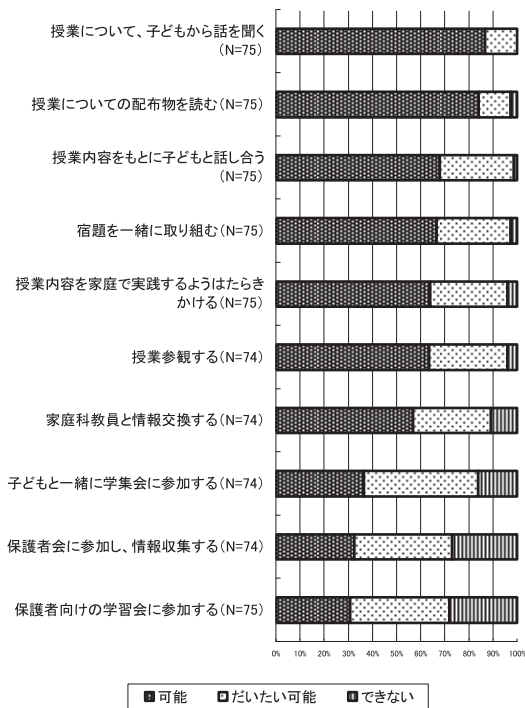


図5 保護者が実施可能な家庭科との連携方法

### 3) 保護者の連携方法に対する要望

学校と家庭の連携の手段として、保護者はどのような方法を考えているのであろうか。図5に家庭科授業で学習した食に関する内容が家庭で実践されるための方法を保護者に依頼した場合、実施可能かを問うた結果を示す。さらに、「だいたい可能」「できない」と回答した者に、その理由を問うた結果を表4に示す。図5から、実施可能と回答した者が最も多かった方法は「授業について子どもから話を聞く」(86.7%)、「授業についての配布物を読む」(84.0%)であったが、これらの方法における保護者の取り組みは受動的であるといえる。次いで、「授業内容をもとに子どもと話し合う」(68.0%)、「宿題と一緒に取り組む」(66.7%)、「授業内容を家庭で実践するよう子どもにはたらきかける」(64.0%)の順に多く挙げられていた。これらは家庭内で子どもとともに取り組むことが求められる方法である。実施可能とした者が少なかった方法は「保護者向けの学習会に参加する」(30.7%)、「保護者会に参加し、情報収集する」(32.7%)、「子供と一緒に学習会に参加する」(36.5%)であり、家庭外での取り組みに対して積極的な参加が必要な方法といえる。

これらの方法が実施できない理由としては、表4から、すべての方法において「親が多忙」と回答するも

表4 保護者が連携方法を実施できない理由（複数回答）

実数は人数（ ）内は%

理由	親が多忙	子どもが多忙	子どもが嫌がる	不必要	関心がない	その他
授業について子どもから話を聞く (N=10)	5 (50.0)	4 (40.0)	1 (10.0)	0 (0.0)	1 (10.0)	0 (0.0)
授業についての配布物を読む (N=12)	7 (58.3)	2 (16.7)	1 (8.3)	2 (16.7)	0 (0.0)	1 (8.3)
授業内容を子どもと話し合う (N=24)	13 (54.2)	8 (33.3)	1 (4.2)	0 (0.0)	1 (4.2)	3 (12.5)
宿題を一緒に取り組む (N=25)	13 (52.0)	2 (8.0)	0 (0.0)	1 (4.0)	0 (0.0)	4 (16.0)
授業内容を家庭で実施できるようはたらきかける (N=27)	9 (33.3)	8 (29.6)	1 (3.7)	1 (3.7)	0 (0.0)	3 (11.1)
授業参観する (N=27)	17 (63.0)	1 (3.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (11.1)
家庭科教員と情報交換する (N=32)	12 (37.5)	3 (9.4)	0 (0.0)	10 (31.3)	0 (0.0)	5 (15.6)
子どもと一緒に学習会に参加する (N=47)	25 (53.2)	4 (8.5)	1 (2.1)	2 (4.3)	2 (4.3)	11 (23.4)
保護者会に参加し情報収集する (N=50)	35 (70.0)	2 (4.0)	0 (0.0)	6 (12.0)	0 (0.0)	9 (18.0)
保護者向けの学習会に参加する (N=52)	33 (63.5)	2 (3.8)	0 (0.0)	3 (5.8)	1 (1.9)	7 (13.5)

が多く、子どもがかかわる方法である「授業について子供から話を聞く」「授業内容をもとに子どもと話し合う」「授業内容を家庭で実践するよう子どもにはたらきかける」においては、「子どもが多忙」を理由に挙げる者がみられた。

なお、これらの方法と図1における「栄養バランスの知識や技術をつける」「食品を選ぶ知識をつける」に対する改善意識との関係を見ると、子どもに「栄養バランスの知識や技術をつける」ように改善したいと思う保護者ほど「授業について子供から話を聞く」(p<0.05)、「授業についての配布物を読む」(p<0.01)ことが可能な者が多くみられた。「食品を選ぶ知識をつける」に対する改善意識との関係を見ると、その改善意識が高い者ほど「授業について子供から話を聞く」(p<0.01)ことが可能な者が多くみられた。

#### 4. 家庭科と家庭との連携の課題

本調査結果から、栄養教育での家庭科と家庭の連携における役割遂行の課題を検討したい。

第一に、保護者が家庭科の授業目標達成のため環境整備を行う支援者として位置づけることの可能性についてである。本調査において、多くの保護者は子どもに対して「栄養的バランスの知識や技術」や「食品を選ぶ技術」を身につけてほしいと願って、家庭においても栄養に関して子どもに対して働きかけを行っていた。しかし、偏食をしている子どもに対して負の強化といえる対応を行っている保護者もみられた。さらに、

子どもに対する栄養教育に消極的な保護者が存在した。このような保護者にこそ、栄養教育の重要性と小学校段階が子どもの健康に重要な時期であり食生活での自立的行動を獲得させる適時期である事を示し、積極的な働きかけを促す手だてを検討する必要がある。

第二に、家庭科における役割としての情報発信と情報受信の可能性である。本調査結果から、情報発信については、「子供から話を聞く」「配布物を読む」など家庭内で実施できる方法に対しては、保護者の協力が得られそうであった。保護者宛の便りの提示内容や方法の検討、さらには学校での授業内容が家庭に浸透するような手立ての検討が必要である。教師が子どもの栄養にかかわる家庭での情報を保護者から受信する手だてとしては、「家庭科教員との情報交換」を約6割の保護者が望んでいたことから、保護者にとって負担が少なく、機能的な方法の検討が必要である。

#### 5. 家庭科と家庭との連携方略

これまでの家庭科授業は、子どもを対象とした授業を設計・実践し、子どもにだけ働きかける傾向があった。しかし、家庭科で学習した内容を具体的に活用する場合は家庭であり、その活用の積み重ねによって子どもに、生活的自立にかかわる実践的技能が獲得されるようになることから、家庭科と家庭の連携を強化することが重要となる。その際には、ただ単に学校や家庭に既定の役割を分担させるという発想ではなく、それぞれの現状を把握しながらそれぞれが何を支援できる

かという観点で取り組むことが重要であろう。

では、子どもの主体的な学びを家庭科担当者と保護者がそれぞれの役割を遂行しながら支援できる新しい連携システムはどのように構築すればよいのであろうか。その構築の手立てとして、次の3点が必要であると考えられる。

一つ目としては、子どもの主体的な活動の支援者同士が連携における共通理解を図る手だての設定である。学校での家庭科における栄養教育を保護者が補強することによって、日常生活行動と学校での学習とをつなぎあわせることを可能とする。保護者は家庭科学習の内容を理解し、教師は子どもの家庭での生活を理解することがまず重要である。支援者である教師および保護者は、支援全体における同方向の見通しを持ったうえで、子どもが日常生活で活用しやすいような環境整備の具体的技法を習得する機会を設定することが必要である。

二つ目として、子どもの活動を支援し、主体的活動の遂行を進める手だての開発である。子どもが学習したいという内発的動機づけを促す刺激となる教材が開発され、さらに子どもの興味・関心の持続を支援するような手だてが開発されれば、子どもは主体的に生活実践力を獲得することが可能になるであろう。

三つ目としては、子どもと保護者への継続的支援を強化できる手立ての開発である。子どもに達成感を持たせ、長期的実践の継続を可能とする支援方法が開発されるならば、家庭科における栄養教育が子どもの生活に融合されるであろう。この場合、子どもおよび保護者への支援負担を軽減することが重要であると考えられる。

## 6. 終わりに

学校教育は子どもだけを対象としてきたが、現状のような教育システムでは子どもの生活を守れなくなっている。家庭科だけで子どもの生活実践力の習得

をめざそうとするのではなく、教師と保護者が連携して子どもの主体的な活動を支援するという観点から、家庭科授業の在り方を変えていく必要があると考えられる。その連携として、融合的な連携の形態<sup>6)</sup>すなわち情報交換・連携調整機能、相互補完機能さらに協働機能が働く連携を構築しようとするならば、子どもの生活的自立を獲得させるために保護者の役割も視野に入れた新しい視点での家庭科カリキュラムを構築する必要がある。保護者を巻き込んだカリキュラム開発は、教師と保護者と子どもとの相互的強化関係を形成し、さらに、保護者自身の生活行動の変容にも寄与することになるのではないかと考えられる。すなわち、家庭を取り込んだ家庭科教育システムを構築することによって、学校は栄養教育の発信基地の役割を担い、家庭生活を修正する役割も担うようになるであろう。

しかしながら、このような観点からの実証的研究はきわめて遅れており、本稿で提起した課題の解決が望まれる。

## 【引用・参考文献】

- 1) 福田公子, 教育実践力をつける家庭科教育法, 大学教育出版, p.10, 2005.
- 2) 林孝, 子どもの学びを支える学校・家庭・地域の役割と連携, 初等教育資料 No.779, p.4, 2004.
- 3) 例えば, 足立己幸他, 知ってますか 子どもたちの食卓, NHK 出版, 2000年.
- 4) 中山勘次朗, 児童の動機づけ志向性と教師の指導態度の認知, 教育心理学研究 第37巻3号, pp.276-282, 1989.
- 5) 例えば, 岩村暢子, 変わる家族 変わる食卓, 勁草書房, 2003.
- 6) 白石克己・佐藤晴雄・田中政文編著, 生涯学習の新しいステージを拓く 第2巻 学校と地域でつくる学びの未来, ぎょうせい, pp.20-22, 2001.